

マタイ福音書講話（1）

- | | |
|-----------|--|
| 1. 執筆者 | 使徒マタイ（異論もあり） |
| 2. 書かれた年代 | 80年代後半 |
| 3. 執筆した場所 | シリア |
| 4. この書の特徴 | ユダヤ人キリスト教徒に対して書かれており、イエス様こそダビデの子孫であり、まことのメシアであることを書いた。 |

マタイ 1章 1～17節 【イエス・キリストの系図】

聖書には「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ」という弟子たちが書いた四つの福音書と言われるものがあります。福音書というのはギリシャ語で「ユーアンゲリオン」といい「良い知らせ」という意味です。いずれもイエス様の語ったことや行ったことを伝えている「イエス様の伝記」のようなものです。ところが伝記にしてはずいぶんバランスの欠けた書き方をしています。伝記ならその誕生から死までを万遍なく記録するのですが、イエス様の誕生のことはマタイ福音書とルカ福音書しか出て来ません。マルコ福音書はイエス様が伝道を始められた30歳から三年間だけのことを書いています。しかもその三年間の出来事でも、最後の一週間のところを力を入れて書いており、全体の八分の三を使っています。ヨハネに至っては二分の一を使っています。これは伝記を書いているというより、別の目的があって書いているということです。それは何かと言うと、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」（ヨハネ 20：31）とあるように、イエス様のことを救い主であると信じて欲しいということなのです。イエス様がお話しをし、悪霊を追い出し、病気を癒したのも、それらが目的であったからではなく、自分のことを信じて欲しかったからです。このマタイ福音書は80年代後半に書かれており、イエス様が死んでから50年ほど経って書かれています。その頃になるとイエス様を見た生き証人たちが亡くなって行って、記録を残す必要が起こってきたということでしょう。教会は50年の間、新約聖書を持たないで信仰を守ってきたということなのです。そこでマタイは特にユダヤ人キリスト教徒に向けてイエス様が救い主であることを書いたと言われています。

1節「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」

「イエス・キリスト」という名称を使うのはマタイ福音書の中では、この1節と18節だけです。キリストとはメシアのギリシャ語訳であって「救い主」とい

う意味です。マタイは最初からイエス様が救い主であるという信仰をもってこの福音書を書いています。またはイエス様が救い主であることを証明しようとして書いたといえるでしょう。イエス・キリストの系図と書かれています、この系図は意図をもって省略され書かれています。それはイエス様がダビデの子孫である正当な王であるということを証明しようとしたということです。

「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」(1:1) ここにまず、アブラハム、ダビデという名前が出て来ます。アブラハムの名前は新約聖書では73回、モーセの名前は80回、ダビデの名前は59回、登場します。その登場の仕方にはそれぞれ特徴があり、アブラハムの場合はユダヤ人の父として用いられ、モーセの場合は「モーセはなぜ…と命じたのですか」と律法との関係で用いられ、ダビデの場合はそのほとんどが「イエス・キリストとの関係」で用いられています。人々は「メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」(ヨハネ 7:42) と言っていたように、メシアはダビデの子孫であると信じられていました。盲人たちはイエス様のことを「ダビデの子よ、私たちに憐れんでください」(マタイ 9:27) と呼びました。盲人バルティマイも「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」(マルコ 10:47) と叫びながらついていきました。イエス様がロバに乗ってエルサレムに入城する時も、多くの民は「ダビデの子にホサナ」(マタイ 21:9) と歌いました。イエス様の受難、復活、昇天についてもパウロはダビデが書いた詩編から多くの箇所を引用して、預言の成就だと証しました。ダビデがそれらのことを詩編の中で預言していたというのです。ユダヤ人にとってダビデ王は、民族の栄光そのものでした。この系図には大勢の王様が出て来ますが、王という称号がつけられているのはダビデだけです。(6節) そのダビデの子孫から救い主が出るとユダヤ人は堅く信じていました。そこでイエス様のこの世での父であるヨセフがダビデの家系であることをここで書き、イエス・キリストこそダビデの子孫であると証しようとしたのです。

2~16節 この系図は次のように大きく三つに分けることが出来ます。

- ① 2節~6節：「**栄光と繁栄の時代**」を表しており、アブラハムからダビデまでの時代であってアブラハムから一つの国家が形成されてくるまでの栄光と繁栄の時代です。
- ② 7節~11節：「**墮落の時代**」を表しており、ダビデ以降の王たちを列記することを通して、国家が墮落してゆき、やがて罪のゆえにバビロンによって国が滅ぼされて捕囚の民となるまでの墮落の時代です。
- ③ 12節~16節：「**回復の時代**」を表しており、バビロンへ移住させられた時から、イエス様が生まれるまでの回復の時代を表しています。

この系図には特徴があります。

①第一の特徴は、この系図に出て来るのは41名ですが、ほとんどの人が無名の人たちであるということです。中には旧約聖書に名前が出て来ない誰だか分からない人が大勢出て来ます。13節のアビウド以降の8名は旧約聖書にも名前が出て来ません。

②第二の特徴は、4人の女性（タマル、ルツ、ラハブ、ウリヤの妻）の名前が出て来るといことです。ユダヤ人の系図に女性を載せるのはきわめて異例です。この4人はすべて外国人です。マタイはあえて外国人の女性の名前を載せることによってイエス様の救いは、ユダヤ人だけの物ではないことを語ろうとしています。

・「ユダはタマルによってペレツとゼラを」(3節) ユダにはイブム婚制度というのがありました。長男が子孫を残さずに死んだ場合、長男の妻を次男が娶って子孫を設け、長男の家系を絶やさないようにしなければならないという制度です。ユダには三人の子がいましたが、長男、次男とも子を設けることなく早死にします。長男の妻タマルは未亡人となるのですが、立て続けに子を亡くしたユダはタマルを不吉な女と思い、三男に嫁がせませんでした。そこでタマルは計略をもって遊女の振りをして、義理の父ユダと関係をもって子供を設けるのです。子が出来たユダは反省し、タマルの正しさを告白しました。創世記に出て来ます。

・「サルモンはラハブによってボアズを」(5節) ラハブはエリコの町の外国人の遊女ですが、イスラエルの民がエリコの町を攻めた時、彼らをかきまい、祝福を手に入れた女性です。後のルツと結婚したボアズを生んだことになっていますが、旧約聖書ではボアズの母となったとは書かれていません。

・「ボアズはルツによってオベドを」(5節) ルツはモアブ人という外国人でイスラエルの民にとっては敵の民族でした。ユダヤ人ナオミの息子に嫁ぎますが、夫の死後、姑のナオミから離れることなく彼女に仕え、ユダヤの地に帰って来て親戚のボアズと結婚し、ダビデ王の祖父を生みます。ルツは敬虔な信仰者として旧約聖書のルツ記に載せられています。

・「ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ」(6節) ヘト人軍人ウリヤの妻は名をバテシェバといいます。彼が留守中にダビデはその妻を奪い、姦淫の罪を犯してしまいます。子どもが出来ると、自分の罪が暴かれるのを恐れたダビデはウリヤを戦場から家に戻そうと策を練りますが、彼は応じません。そこでダビデはウリヤをわざと最前線に置き去りにする命令を下し、彼を殺しました。ダビデは姦淫の罪に殺害の罪を加えたのです。彼の死後、預言者によって罪が暴かれ、彼は懺悔し、後にバテシェバを妻として迎えソロモンが生まれます。ここにはダビデの罪が載せられています。

③第三の特徴は、偶像崇拜の罪を犯した王たちがたくさん出て来るといことです。これらの王たちの系図もあえて4人を省略し14代に構成しています。

・「ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、ヒゼキヤはマナセを、」(9～10節)多くの王が出て来ますが、アハズ王(9節)は子どもをいけにえとして火に奉げた王です。「諸国の民の忌むべき習慣に倣って、自分の子を火に通らせることさえした。」マナセ王については「諸国の民の忌むべき習慣に倣い、主の目に悪とされることを行った。…主の神殿の中に彼は異教の祭壇を築いた。…彼は自分の子に火の中を通らせ、占いやまじないを行い、口寄せや霊媒を用いるなど、主の目に悪とされることを数々行って主の怒りを招いた。」(列王記下16:2～6)と書かれています。

④第四の特徴は、14代を三回繰り返しているというものです。

・「こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。」(17節)マタイは途中の系図の人物を省いて、むりやり14代にして、それを三回繰り返しています。一つの解釈は、ヘブライ文字はそのまま数字になっており、ダビデという綴りを数字に変えると14になります。ゆえにイエス様はダビデの子孫であるという解釈があります。もう一つの解釈は、 $14 \times 3 = 42$ です。42を書き換えると 6×7 です。6は不完全数であり7は完全数です。つまり42は不完全を七回繰り返すという意味で、不完全なイスラエルの歴史を意味しようとしているのです。ここには人間の罪がいっぱい書かれています。要するに、この系図は、イスラエルの罪と嘆きの系図です。ここに出て来る無名な人々、女性たち、罪人たち、外国人たち、罪を犯した王たち、奴隷となった人たち。私たちは名前こそ違っても、この中の一人なのだというのです。

●ルカの福音書にも系図が出て来ます。

・「イエスはヨセフの子と思われていた。ヨセフはエリの子、それからさかのぼると、…セト、アダム。そして神に至る。」(ルカ3:23～38)

この系図によるとヨセフの父はエリであり、マタイが書いたヤコブと違っています。ルカはマタイが用いた(Q資料)とは違う資料を用いて系図を書いています。この系図の特徴は、アダムまでさかのぼり、「そして神に至る」と結んでいるところです。神様とイエス様とでこの人間の系図をはさんでいる形になります。人間はもともと神から出た、神の子孫なのですが、神の子と呼ばれるような系図ではなくなってしまいました。罪によって汚れ、神に帰ることが出来なくなってしまったのです。そこで切れてしまった神の系図をもう結び直し、人類を神の子孫に戻したのがイエス様だということをルカは書いているのです。

15～16節「マタンはヤコブを、ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになったのである。」

「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。」とありますから、これはヨセフの系図であることが分かります。それまでは「誰々は誰々をもうけた」と書かれているのに、ここにきて「ヨセフはイエスをもうけた」とは書かれていません。「ヤコブはヨセフをもうけた」と書き、「マリアからイエスがお生まれになった」と書いたら、系図がつながらなくなるので「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた」と書き換えています。要はヨセフの系図はここでプチンと切れているのです。

この罪に溢れたヨセフの系図を、イエス様は自分の系図として受け取ったということが書かれているのです。マタイはこの系図を《福音》として書いています。キリストは、人間の歴史というものを、ご自分の歴史として受け継がれたということを伝えようとしています。彼らの系図を自分の系図とすることを、キリストは嫌がらなかったということなのです。または、ご自分の家系、家族として負われたということを言っているのです。

●私が学生の頃、行っていた韓国の統一協会（カルト宗教）の系図の見方はこれとは全く違います。人間が神様の条件を満たした時、メシアはやって来る、救いはやってくる、地上に神の国は実現すると教えました。だから献金をしなさい、伝道しなさい、とノルマが課せられて、一週間に韓国に10億円を送っていたのです。そしてノルマが達成できない時、条件に満たされない時、あなたのせいで救いは実現できなくなった、神の国は遠くなったと責められるのです。しかも韓国は系図をととても大事にします。祖先が苦勞して土台を築き、やっとこの教えを聞く人物であるあなたを立てた、あなたは家族や氏族のメシアであると言われます。あなたが失敗したら、先祖の苦勞が水の泡となり、再び家族のメシアを立てるために何百年も霊界で苦しまなければならないと教えます。要するに彼らの教えは、立派な先祖から救いは出るというものであって、罪を犯したら家族のメシアは出ないというのです。

彼らの教えは、立派な人の系図からメシアが生まれるというものです。しかし、マタイは違います。この系図から救いが来たのではなく、この汚れた系図へと救い主はやってきたというのです。「から」ではなく「へと」救い主は来るのです。主イエスは「自分の民を罪から救う」（マタイ 1:21）ために来たのです。そのようにして「神はわれわれと共におられる」が実現したのです。人間の歴史を背負い、罪を犯す人間を自分の家族に迎えられ、永遠に運命を共にしようと、ご決断された、その神様のご意志にのみに私たちの救いはかかっているのです。